

兵庫が育む 心豊かで自立した人づくり

# 兵庫教育

4 月号  
2018 No.806

特集

児童生徒が安心して過ごせる学級づくり



学習発表会 一吹奏楽部演奏一

～伊丹市立東中学校～



月刊「兵庫教育」  
URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会  
編集：兵庫県立教育研修所

## 特集

## 児童生徒が安心して過ごせる学級づくり

## 学校訪問

「地域にささえられ、地域をささえる」学校をめざして

伊丹市立東中学校

## 巻頭言

明日の兵庫を拓く、未来を担う子どもたちのために  
～教職員の資質・能力の向上を目指して～

県立教育研修所 1

## 論文

俺たちはなかなかやるな  
～授業の中で学級づくり～

若手教師応援セミナー「元気塾PLUS」代表

なかしま まさのり  
仲島 正教

4

## 教育実践

自分を大切に、人を大切に  
～なかまと共に伸びる子をめざして～

南あわじ市立北阿万小学校 教諭

わたなべ あき  
渡邊 亜紀

8

川西市における「魅力ある学校づくり調査研究事業」の取組について  
～新たな不登校を生まないために～川西市教育委員会事務局  
指導主事なかにし りょう  
中西 亮

12

生徒が自信をもって過ごせる環境づくりへの挑戦

県立多可高等学校 主幹教諭

うすい かずひこ  
臼井 和彦

16

## 授業実践

「わだやマーケット」開催  
～総合学科の学習を地域へ～

県立和田山高等学校 教諭

たなか ゆうすけ  
田中 裕輔

24

## 「自殺予防に生かせる教育プログラム」の活用（第4回）

学校からの実践報告

県立教育研修所 心の教育総合センター 27

## 授業づくり

筆算が「わかる」ということ  
～ある日の児童の質問から～

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授

おかべ やすゆき  
岡部 恭幸

29

4月号 香美町立佐津小学校  
イラスト 教諭 河原 夏弓



## グローバル化する社会への対応 (第35回)

グローバルキャリア人材を育成するための機会

WHO神戸センター 上級顧問官 のぎしんじろう 野崎慎仁郎 31

## 県の施設紹介

学校・先生を応援するひとはくのプロプログラム

県立人と自然の博物館 34

## 連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導 (第59回)  
特別支援学校高等部でのキャリア教育の取組について

県立出石特別支援学校みかた校 主幹教諭 やすはら せい き 安原 聖生 36

## 管理職による随想

チーム泉中  
～V・S・O・P・Cを目指して～

前加西市立泉中学校長 うに みつひろ 宇仁 光浩 37

## 施策解説

平成30年度「指導の重点」について

県教育委員会事務局 教育企画課 38

## コラム「教育の接点」

戦い済んで

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問 はやし よしき 林 芳樹 40

## 編集後記

### トピックス P20～23

- 
- (但馬) 豊岡市立港中学校  
守っていきこう！  
私たちの自慢の浜を ..... 22
  - (播磨東) 加東市立社幼稚園  
園児の主体性を育む ..... 21
  - (播磨西) 相生市立若狭野小学校  
地域とつながり 地域とともに ..... 22
  - (県立) 県立篠山東雲高等学校  
農業を学び、農業で学ぶ ..... 20
  - (丹波) 篠山市立城東小学校  
「ふるさと」に学ぶ～製茶体験～ ..... 23
  - (神戸) 神戸市立竜が台小学校  
学校の特色づくりをめざして ..... 20
  - (阪神) 西宮市立学文中学校  
「学文太鼓は全員太鼓」 ..... 21
  - (淡路) 淡路市立津名中学校  
食育推進に取り組んで ..... 23

〈編集企画〉 岸本 寧 阪下 嘉一 里 知純 清水 裕貴  
高見 秀樹 村中 利章 県立教育研修所(義務教育研修課, 情報教育研修課)

特 小学校  
集  
No.1

自分を大切に、人を大切に  
～なかまと共に伸びる子をめざして～



南あわじ市立北阿万小学校  
わたなべ あき  
教諭 渡邊 亜紀

1 はじめに

本校は、淡路島の南端に位置した児童数144名の小規模校で、校舎4階からは美しい田園風景を望むことのできる地域にある。自然豊かなこの土地で育つ子どもたちは、明るく素直であるが、人間関係のトラブルやインターネットによるトラブル等、人権にかかわる問題が起こっていた。

何が子どもたちの課題になっているのかを明らかにするため、人権アンケートを実施するところから取組を始めた。結果からうかがえたことは、子どもたちの自己肯定感や自己有用感が十分に育っていないということであった。

そこで研究主題を「自分を大切に、人を大切に」とし、子どもたちの自尊感情を高めるための取組をすすめてきた。特に平成28年度は特別活動について、人権教育の視点から改めて活動内容を見直し、縦割り活動や児童会活動で自己肯定感・自己有用感を高めていくことを中心に計画や指導を行った。

また、南あわじ市いじめ防止プロジェクトとして、児童会企画の「いじめ0！運動！」を展開した。

2 研究の内容

(1) 縦割り活動「きたあまのよいこ」

本校では、8つの植物の名前とチームカラーでなかよし班を設定している。

き・・・ききょう（青）	の・・・のぎく（白）
た・・・たんぼぼ（黄）	よ・・・よめな（紫）
あ・・・あさがお（赤）	い・・・いぶき（緑）
ま・・・まんさく（橙）	こ・・・コスモス（桃）

全校生がこの8班に分かれ、遠足や運動会、集会活動など、年間通して様々な行事や活動を行っている。

①春の遠足

1年生を歓迎するとともに、児童会が考えたゲームに班対抗で取り組み、楽しく班の仲間とのふれあいを深めている。出発前には、遠足で楽しみにしていることや、めあてを発表し、お互いに拍手を送って認め合うことで、グループの一員としての自覚、所属感をもつことができる。

なかよし班での初めての活動となる遠足において、班のメンバーと楽しく過ごすことで、子どもたちは、これからのなかよし班活動に期待を寄せ、班のみんなと協力していこうという気持ちをもつことができている。



▲ 春の遠足 めあて発表

## ②運動会

5月に、なかよし班対抗で行っている。6年生を中心に、各班で応援合戦、替え歌・振り付け・コールを考え、低学年に教えている。

学期の初めに集団行動を身につけ、集団の一員としての自覚を高めることができ、高学年には、自主性・創造性を養う良い機会になっている。



▲ 応援合戦練習風景

## ③北小タイム（なかよし班遊び）

リーダーを中心に遊びを考え、どの子も楽しく遊んで親睦を深めている。6年生は1年生を教室へ迎えに行ったり、集合場所まで手をつないで連れて行ったりしている。また、低学年は、なかよし班遊びのある日を楽しみにしており、遊びに喜んで参加している。どちらも、とても嬉しそうな良い表情を見せている。

学期に1回はペア読書を計画し、上級生が下級生に絵本の読み聞かせを行っている。

上級生は前もって一生懸命に練習し、本番に臨んでいる。和やかな雰囲気の中で読み聞かせが行われ、自然に「ありがとう」「楽しかった」という言葉が交わされ、活動を終えている。

縦割り活動を通して低学年は自分でできることは進んでやり、困ったことは上級生に相談する。中学年では、低学年に寄り添い、助けながら上級生に協力する。高学年では集団のリーダーとしての役割を果たし、グループをまとめるといった、それぞれの学年に応じた姿勢が定着し、次学年へとひきつがれるようになっていく。

同学年の中では十分な自己有用感を得られなかった児童も、高学年としてグループをまとめ、低学年の世話をすることで、少しずつ自信を持つことができていく。

## (2) いじめ0！運動！（児童会活動）

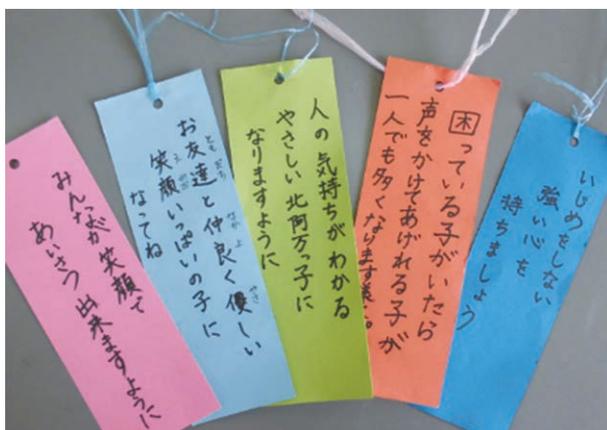
児童会運営委員が中心となり、いじめ防止や楽しい学校づくりを呼び掛け、本校が笑顔いっぱいになるための活動を進めた。

### ①にこにこパトロール

休み時間の様子を見学が観察し、楽しそうに過ごしている「にこにこポイント」を見つけ、全校生に紹介する。紹介された学年には、にこにこバッジを渡した。もめごとが起こっている場合は、話を聞いてあげたり、注意を促したりした。にこにこパトロールをすることで、笑顔が増えたと話す児童が多くいた。

### ②七夕集会～短冊作戦～

毎年行われている七夕集会に、保護者にも短冊を書いてもらい、家庭を巻き込んだ活動とした。



▲ 寄せられた短冊

各家庭でいじめについて考え、本校を笑顔いっぱいにするためにはどうしたら良いか話し合ってもらい、話し合った内容を願い事にして短冊に書いていただいた。児童会が数点読みあげて紹介した。

心温まる短冊が多数寄せられ、保護者の願いも全校生で共有することができた。

③みんなのステキ☆ツリー作戦！～みんなのステキを見つけてツリーをかざろう～

友だちのステキな行動を見つけ、カードに書いてなかよし班のツリーに飾る活動を、人権週間に合わせて行った。

- ・みんな、だれかが笑顔になるためにしていたこと（黄色カード）
- ・してもらって笑顔になったこと（オレンジのカード）

参観日を利用し保護者にも子どもたちのステキなところ（ハートのカード）を書いて、飾ってもらった。



▲ ステキ☆ツリー

④家族でチャレンジ！なかよし連歌

家族で気持ちを伝え合う歌を詠み、完成した作品をふれあい参観に掲示した。



▲ なかよし連歌作品

児童が家族へ気持ちを伝える発句（5・7・5）を詠み、児童の歌に返答する形で下の句（7・7）を家族に書いてもらう。

完成した全校生の作品が掲示され、学校中が温かい雰囲気に包まれていた。保護者も掲示された作品に見入り、各家庭の出来栄に楽しい会話で盛り上がっていた。

⑤ありがとう・にこにこ作戦！

リーダーとして活躍してくれた6年生への

感謝の気持ちをカードに書いて、6年生を送る会の会場を飾った。チームカラーのにこにこカードにメッセージを書き、裏面には、思い思いのにこにこ顔を描いた。

8色のカードが会場をさらに華やかにしてくれ、入場してきた6年生も目を輝かせて喜んでいた。



▲ にこにこカード

⑥あいさつ運動

学期初めの生活目標を「気もちよくあいさつする子」に設定し、児童会を中心に「あいさつがんばり隊」としてあいさつ運動を行った。運動中は「笑顔いっぱい！いじめ0！」と書かれたのほりを立てて、いじめ0！運動！の意識付けを図った。

児童集会でがんばり隊の参加を呼びかけ、あいさつ運動に自由に活動できるようにした。



▲ 児童会によるあいさつ運動

3学期には、高学年の様子を見ていた低・中学年からの参加が増え、元気な挨拶で活動を盛り上げてくれた。

### ⑦いじめ0！運動！だよりの発行

いじめ0！運動！を家庭と連携した活動にするため、活動のお知らせや協力を呼びかける「いじめ0！運動！だより」を児童会が発行した。



▲ いじめ0！運動！だより

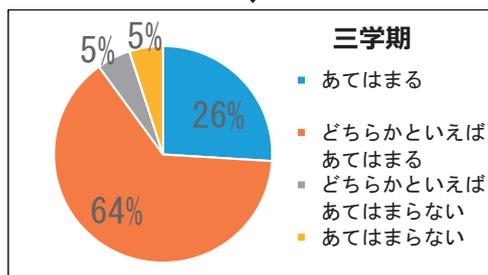
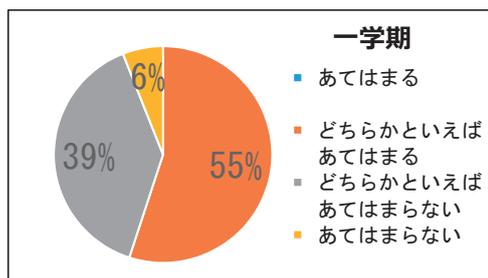
4・5・6年用 「自分を大切に、人を大切に」アンケート（3学期）  
年 組（ ）  
学校生活を さらに よくしていくために、自分自身や クラスのことを 見つめ直してみよう。

	◎	○	△	×
1. 自分のことが すきですか。				
2. 自分で、自分の いいところを 見つけれられますか。				
3. 友だちの だれとでも、遊んだり、話をしたり することが できますか。				
4. みんなの前で、自分の気持ちや 意見を はっきり言えますか。				
5. むずかしいことが あったとき、まげずに がんばることが できますか。				
6. 自分で 自分のことを、「はさかしい」と 思うことが ありますか。				
7. まちがったことや、わるいことをしてしまったとき、自分のしたことを すなおに みとめることが できますか。				
8. 努力すれば、できないことでも、できるようになると 思いますか。				
9. 先生や友だちと いっしょに、勉強や運動を がんばられていますか。				
10. クラスのみんなは、あなたに やさしい ですか。				
11. クラスのみんなは、あなたの 提案や考えを きちゃんと聞いてくれますか。				
12. クラスのみんなは、あなたが がんばったときに ほめてくれますか。				
13. クラスのみんなは、あなたが つかいにくい気持ちや かなしい気持ちになったとき、はげましてくれくれますか。				
14. 友だちが 悲しんでいるとき、その子の気持ちを わかろうと 思いますか。				
15. クラスのだれにでも、みんな かならず いいところがある と 思いますか。				
16. 友だちが こまっているとき、あなたは、たすけて あげられますか。				
17. 「クラスみんなの役に立った」と、自分で 感じることは ありますか。				
18. あなたのクラスは、自分の考えを自由に出し合っていると 思いますか。				
19. あなたのクラスは、活動や遊びをするとき、だれもが 不公平なく、平等に参加できていますか。				
20. あなたのクラスは、ルールや約束をまもることを 大切にしていますか。				

▲ 実態把握アンケート

## 3 成果と課題

自己肯定感や自己有用感の向上をねらい、教育活動を進めてきた結果、一般的には高学年になるほど低下しがちな自尊感情において、著しい低下が見られなくなっている。昨年度末の児童へのアンケートでも、自己肯定感、自己有用感の高まりをみることができた。授業の中では、友だちの考えや作品を褒めたり、認めたりする発言が、どの学年でも出来るようになってきている。



▲ 実態把握アンケートの結果  
〈自分のことが好きですか？〉

特別活動においては、今後も異年齢集団の活動のよさを生かし、子ども同士の「頼り頼られる」良好な関係を築かせていきたい。

これらの活動や取組を通して、児童の「集団の高まり」をつくり上げ、学校と家庭・地域が力強く子どもを支えながら、「なかまと共に伸びる子」を育てていきたいと考えている。

特 中学校  
No.2 集

川西市における「魅力ある学校づくり  
調査研究事業」の取組について  
～新たな不登校を生まないために～

川西市教育委員会事務局

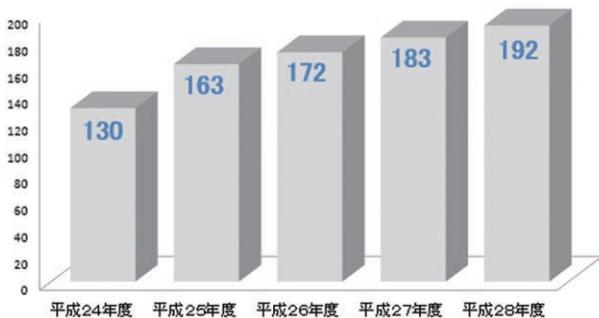
指導主事 なかにし りょう 中西 亮

1 はじめに

川西市は、兵庫県南東部に所在し、大阪府との県境に面している。市内小学校は16校で、児童数は8,069名、市内中学校は7校で、生徒数は4,121名、特別支援学校は1校で、22名の児童生徒が在籍している。

本市の抱える教育問題の中で、極めて喫緊の課題と捉えているのが、不登校の問題である。今日では、家庭環境や地域社会の変化に伴い、学校が直面する生徒指導上の諸問題も新たな様相を呈している。

こうした中、本市中学校における不登校生徒数（以下、不登校数）は、図1のとおり、増加傾向にあり、生徒の社会的自立にとって大きな課題となっている。



▲ 図1 川西市立中学校における不登校数

本市は、不登校を減らすため、平成28年度から2年間にわたり、文部科学省国立教育政策研究所から委嘱を受け、「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組んだ。

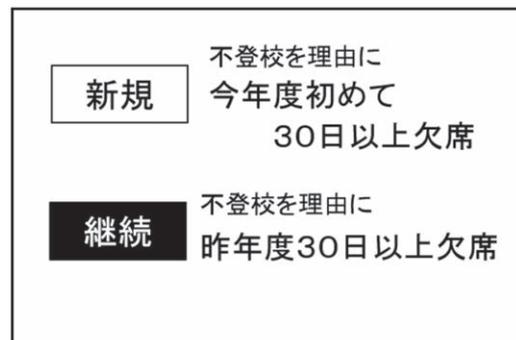
調査研究としては、不登校状態にある児童生徒への支援を進める一方で、新たな不登校を生まない取組を進め、不登校未然防止策を市全域に波及させていくことが目的である。

2 川西市の魅力ある学校づくりコンセプト

不登校やいじめを未然に防止するには、全ての児童生徒が安心・安全に学校生活を送ることができ、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できる学校づくりを進めていく必要がある。

本市では、不登校数を減らすために、まず、学校に来ている児童生徒を不登校にさせない「未然防止」に焦点を絞り、「なぜ、学校に登校し続けることができるのか」を追求し調査研究を進め、検証していくこととした。

3 不登校を新規と継続に分ける



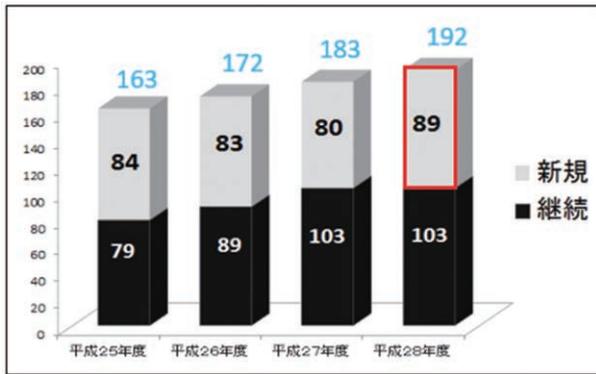
▲ 図2 不登校の考え方

図2のように不登校を新規（白）と継続（黒）に分けて考えた。

新たな不登校を生まないためには、チーム学校の同僚性をいかし管理職・教職員が一丸となって新規（白）を減らすことが必要である。

図3は、平成25年度以降の川西市立中学校における不登校数を新規（白）と継続（黒）に分けたものである。

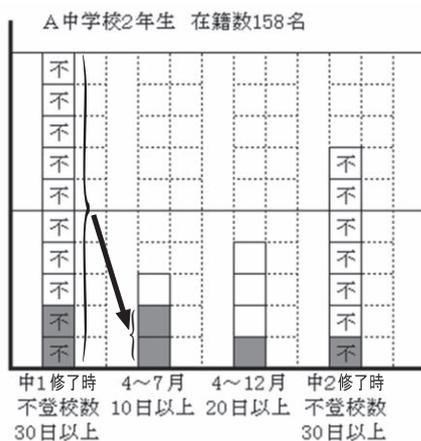
平成25年度以降4年間で毎年80名以上の新たな不登校が発生していることがわかる。



▲ 図3 川西市立中学校不登校発生状況

特に平成28年度は、過去4年間で最も多い89名もの新たな不登校が出ている。本研究は、この新規（白）89名をいかに減らすかがポイントである。

#### 4 不登校データの見える化



▲ 図4 【例】不登校数の見える化

図4は、ある学校の中2の不登校の発生状況を新たな不登校（白）と継続の不登校（黒）に分け、ブロックを積み上げることで「見える化」したものである。「見える化」することで新たな不登校がどの時期に発生したか動向がわかる。各学期の学年全体の実態も把握でき、学校の取組状況がわかることで、その学校、その学年にピンポイントで助言ができる。

見える化した図4から分かることは、A中学校の2学年は、1年修了時に不登校が10名発生している学年であったが、2年修了時には、不登校数が7名になり、3名の減少が見られた。新たな不登校数は、8名から6名となり2名減少、継続の不登校数は、2年生修了時には1名となった。つまり、1年生修了時に不登校であった生徒のうち9名が登校復

帰を果たすことができたことになる。しかし、より分析すると2学期（12月終了時点）に新たな不登校数が3名だったが、3学期修了時に2倍の6名となっている。このことから、この学年は、夏休み明けには、不登校傾向の生徒は増えなかったにも関わらず、冬休み明け3学期に新たな不登校数が2倍となってしまった。冬休み明け3学期に何か原因があったのでは・・・と学年で原因分析し、課題解決策を立てることができる。私は、平成28、29年度において、市内全中学校全学年の不登校について見える化した一覧表を作成し、その資料の見方・活用方法について、全教職員へ研修を行った。

#### 5 意識調査の実施

新規数の増減を観ていく「ものさし」として、子どもの声を聴く調査（意識調査）を年に4回学期末に小5・6年生、中1・2・3年生の市内全ての児童生徒に実施した。

意識調査は、

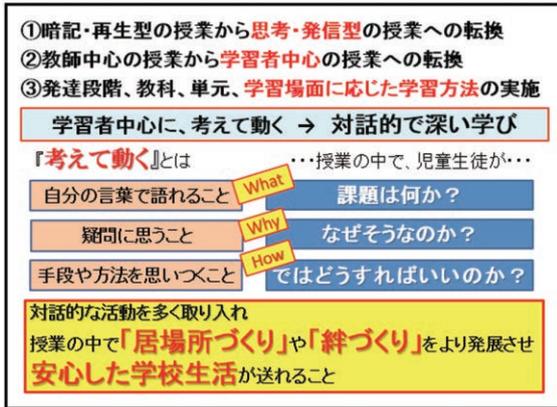
- ア 学校が楽しい
- イ みんなで何かをするのが楽しい
- ウ 授業に主体的に取り組んでいる
- エ 授業がよくわかる

の項目について、児童生徒に回答させ、

- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

の4件法で聞き取り、特に、「1 当てはまる」の回答数に着目し、その増減（調査結果）に徹底してこだわった。

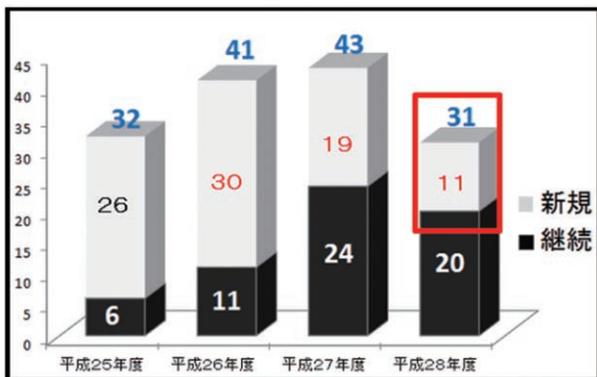
1年目の研究指定校（H中学校）では、意識調査の質問項目の中で特にウ、エの回答について、「1 当てはまる」の増減に徹底してこだわって、授業の工夫改善をすることとした。質問項目ウ、エの回答数の数値を高くするために研究指定校は、行事、自治活動等、自己有用感を育む教育活動など、良い取り組みはそのまま継続し、図5を中心に「わかる授業づくり」に励んだ。



▲ 図5 わかる授業実現に向けて

私は、意識調査のウ・エの結果に着目した。そして、特に授業者が、対話的な活動を取り入れ、自分が大切にされている、認められているなど存在感が実感できる「心の居場所づくり」に努めることにより、生徒が教師や友人との心の結びつきや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同活動を通して社会性を身に着ける「絆づくりの場」となる授業づくりに努めるよう助言してきた。

## 6 1年目の成果



▲ 図6 研究指定校における不登校数

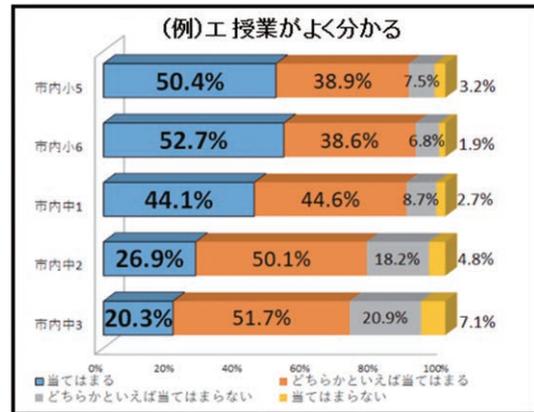
研究指定校には、①意識調査の一つの項目結果にこだわり、全教職員が共通理解を持って取り組んでいるか②客観的データを分析し実態が把握できているか③新たな取組ではなく、今やっているよい取組を全教職員がどう理解してやっているか④今、学校全体で取り組んでいることが本当に浸透しているかという四つの視点で、繰り返し助言を行った。その結果、図6のように学校全体では、新たな不登校の抑制に成功することができた。

## 7 2年目：全市域に未然防止策を波及



▲ 図7 2年目の方向性

1年目の検証結果を全市的に広め、市内全中学校で不登校未然防止策を広めた。



▲ 図8 意識調査の傾向

図8では、意識調査質問項目のエについて、市全体平均を示したものだが、どこの中学校区においても同じように、小学校5年生、6年生で「当てはまる」の割合(数値)を上げてきて中学1年生になったら下がり、さらに中3まで下がり続けるという傾向が出た。小6から中1にかけては、学習環境の変化、授業内容の高度化に伴い、どうしても数値は下がる傾向にあると考えられるが、私は、この数値に着目し、「小学校から中学校への円滑な接続ができれば、この下げ幅は少しずつ良くなるのではないかと市内校長会、教頭会において課題を示しながら、助言を行った。さらに、学校長、教頭、学年主任が共にPDCAシートを作成し修正しながら学校教員一丸となって戦略的に取り組むよう促した。(図9)

(1)未然防止のための学校運営戦略について

【第3回意識調査結果】	中1	中2	中3	学校
意識調査 質問項目	%	%	%	%
ア 学校が楽しい	51.0	68.8	55.8	58.2
イ みんなで何かをするのは楽しい	52.9	65.6	54.8	57.6
ウ 授業に主体的に取り組んでいる	39.4	53.1	43.3	45.1
エ 授業がよくわかる	35.6	52.1	51.0	46.1

課題項目	目標値	学期末結果	目標値差
工	38.0%	46.1%	+8.1%

課題項目とした理由	目標(年間)
第1回目の意識調査の結果から、本校では、ウ・エの項目が低く、授業実践力に課題が多いものと思われる。もう一度初心にもどり、まず教職員全員が日々の授業を見直すとともに、改めて、生徒の実態や能力に応じた授業を展開していくことが不登校未然防止につながると考えたから。	課題項目工について、38%まで引き上げる。特に3年生については、32%達成を目標に取り組み、新規の不登校を0人以内にと定めることを目標とする。

目標値達成のための重点課題
1年生では、小学校との環境の変化や学習内容の高度化によりエの項目結果が下がる傾向にあるが、各教科の特性に応じた具体的な学習方法、授業規律の確立等、授業を取り組む姿勢について重点的に取り組み、下がり幅を最小限に止める。2・3年生では、各教科における授業改善に重点を置き、学習集団の雰囲気や理解力に力じて、

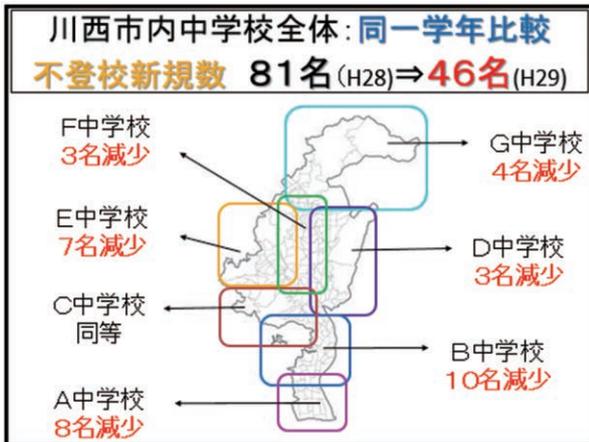
(2)計画

学年	課題項目(工:授業がよくわかる)の割合	1~3月に重点・強化する内容
1年	1年(小6) ① 36.2%	各学級内のグループ学習組による教え合い、学び合い学習の環境を確立し、誰もが発表できる機会を多く設定する。
	1年 ② 31.4%	
	1年 ③ 35.6%	
2年	2年(中1) ① 40.6%	生徒たちが落ち着いて授業に向かふ姿勢を育て、全教師が半時間のおらひ内容を明確にし、見直しをもって取り組ませる。
	2年 ② 35.4%	
	2年 ③ 52.1%	
3年	3年(中2) ① 27.2%	日々の授業の積み重ねの大切さを生徒に周知し、全教科において、生徒自身が主体的・対話的な授業づくりに取り組む意欲を追求する。
	3年 ② 30.8%	
	3年 ③ 51.0%	
学校全体	学校全体中 ① 34.6% 学校全体中 ② 32.5% 学校全体中 ③ 46.1%	分かる授業の創造を重点に置き、研修担当を中心に分掌連携を図る。全教科の各単元に習得動を揃えて、対話的に取り組む時間を計画的・継続的に実施する。

\*「当てはまる」と回答した生徒の割合 ①=第1回目(H29.3)、②=第2回目(H29.7)、③=第3回目(H29.12)

▲ 図9 PDCAシートの作成と活用 (例)

## 8 成果：不登校新規数の抑制に成功



▲ 図10 2年目成果：H28とH29.12月末を比較

2年間、市内中学校7校を中心に不登校未然防止に重点を置き、取り組んできた結果、新たな不登校を増やさないことに成功した。図10においては、平成29年度12月末時点での不登校数(同一学年との比較)を示したものが、新たな不登校の数は、81名から46名に減り、43.2%減となり、市内7中学校のうち、6中学校に新規数抑制の効果がでてきている。

また、平成28年度1年生の不登校新規数は、46名に対し、平成29年度1年生は、23名とな

り、前年度の中学1年生と比較しても新規不登校数を大きく下回るといった成果も出た。

## 9 2年間のまとめ

### ▼ 主な取組と働きかけ

- ① 教頭会・校長会での研修の実施
- ② 意識調査の実施・分析
- ③ PDCAサイクルでの取組
- ④ 不登校未然防止教職員研修の実施
- ⑤ 他府県との情報交流
- ⑥ 生徒指導・不登校担当教員・学年主任とのヒアリング



▲ 図11 川西市の取組のまとめ

〈新しい取組ではなく、今取り組んでいることが本当に浸透しているか〉

どの学校の教師も毎日、真剣に児童生徒と向き合い、「居場所づくり」に励み、児童生徒は、「絆づくり」を行っている。今回の研究では、これまで各学校が大切にしてきた取組を計画的・継続的に見直しするだけで大きな効果が見られた。見える化したデータを学年教員で点検し、取組の見直しをすることは、子どもの内面への共感的理解を深め、実効性のある取組を促進する(図11)。それは、生徒と教師の関係性が良好になり、生徒と教師との「絆づくり」へも発展していく。

教師は、日々忙しく、やるべきことが多い。それでも年に3回は、調査をして子どもたちの声を聴き、大人同士で話し合う時間を持って欲しい。まだまだ、学校で、できることはたくさんある。これからも未然防止の取組を着実に進めていきたい。

特 高等学校  
No.3 集

生徒が自信をもって  
過ごせる環境づくりへの挑戦



県立多可高等学校  
主幹教諭 臼井 かずひこ

1 はじめに

本校は、秀麗な姿をもつ妙見山みょうけんさんの山麓にあり、敷地の隣には飛鳥時代に築かれた16基からなる古墳が広がっている。このような生徒の気持ちを落ち着かせるような抜群の環境にある本校は、教育目標を、「福祉のこころ」を育み、自立して未来に挑戦する生徒を育てることとし、多可郡唯一の県立高校として地域密着型の教育を推進している。1年生では高校で学ぶ学習の基礎・基本の定着に力を入れ、2年生から福祉・看護医療系への進学や就職を目指す生徒が学ぶ「福祉ボランティア類型」、大学進学を目指す生徒が学ぶ「総合カルチャー類型」、商業を中心としたスキルを身につけ、資格を取得し進学や就職を目指す生徒が学ぶ「情報ビジネス類型」に分かれる。小規模校の良さを活かし、教員は担当する学年に拘らず、生徒とコミュニケーションをとり、生徒情報を共有し指導に当たっている。

2 多彩な行事と目標

月	行事	月	行事
3	中学校との情報交換会 卒業式、入学式、対面式 遠足(2・3年)	9	CoCoLo-34とHR実施 生き方講演会 生徒情報交換会
4	新入生オリエンテーション週間 妙見山登山(1年) 情報講演会(1年)	10	修学旅行(2年香港・マカオ) 特別支援学校との共同学習
5	面談週間 授業参観 合同交通指導	11	ふれあい育児体験 タイ王国生徒来校 CoCoLo-34とHR実施
6	生徒の情報交換会 妙見祭(文化祭) 特別支援学校との共同学習 多可高ちいきふれあいプロジェクト(3年)	12	いじめアンケート報告会と検討会 多可高ちいきふれあいプロジェクト(1年) 東日本大震災復興支援ボランティア 生徒情報交換会
7	球技大会 大学企業見学 車いすバスケットボール体験 芸術鑑賞会 タイ王国生徒派遣 三者面談	1	多可高フレンドシップコンサート CoCoLo-34とHR実施 校内マラソン大会
8	TARAカップ(車椅子バスケットボール大会) PTA合同面接指導 夏祭り校外指導(PTA合同) PTA奉仕作業	2	卒業生を囲む会(1・2年生) 特別支援学校との共同学習 多可高ちいきふれあいプロジェクト(2年) 卒業式・表彰式
		3	球技大会 生徒情報交換会及び引き継ぎ 卒業式

▲ 「福祉のこころ」を育む年間行事

このように主なものを列挙してもその種類は盛沢山であるが、これらはすべて地域に密着しながら「福祉のこころ」を育むという終始一貫した目標を先に据えている。本校内外での様々な活動、様々な人間との関わりをとおして、次の3点の「福祉のこころ」の涵養を目指して取り組んでいる。

- ①命を大切にし、自他共に認める思いやりの心
  - ②地域社会を支える共生の心
  - ③受け身ではなく、自発的に物事を考え、地域に活かそうとする自発の心
- (1) 交流活動やボランティア活動、ふるさと貢献事業を通して

本校では、次の①～⑤の様々な交流事業やボランティア活動等を行っている。クラスから外に出て、生徒一人一人が活躍して得た自己有用感をクラスに持ち帰り、クラス、学校全体に還元できるよう心掛けている。

- ①特別支援学校との交流及び共同学習  
本校の生徒が特別支援学校の陶芸等の授業に参加したり、特別支援学校の生徒が本校の書道やレクリエーション、英語の授業を一緒に受けたりした。両校の生徒が打ち解けるのに時間はかからず、共に助け合う姿勢を育む場となった。
- ②ちいきふれあいプロジェクト  
地域の公共施設、老人施設、子ども園、小学校での交流及び清掃活動を学年単位で、クラスの壁を越えて実践した。
- ③東日本大震災復興支援ボランティア  
募金活動から準備、校内プレゼン、現地での活動、活動報告プレゼンまで、一貫した自主的ボランティア活動を行った。



▲ 東北ボランティア 現地の幼稚園児との交流

#### ④地域のイベントの企画・運営や演奏活動

地域の行事（子どもまつり・こんぴら大祭）の企画・運営や、町内のイベント（ふるさと産業展・養徳会まつり・社協まつり）などに参加し、吹奏楽の演奏を行った。

#### ⑤生き方講演会

社会の第一線で活躍されている専門家を講師に招き、町内中学3年生にも参加を呼びかけた。参加した生徒にとっては、生き方を考える貴重な機会になった。

#### (2) 多可町議会と高校生模擬議会



▲ 高校生模擬議会の様子

地元多可町の町議会と本校生徒による「高校生模擬議会」を行った。町議会議員の皆さんから議会の仕組みや議会に提出する一般質問通告書について教わり、住みやすい町づくりについて町議会議員と話し合った。高校生模擬議会本番では、高校生の質問に町議会議員が答弁し、またその答弁に再質問をする等、活発な議論が交わされた。高校生模擬議会での質問から「賑わい復活プロジェクト支援事業」が条例化され、その事業の一つとして、

金比羅神社大祭が復活に向けて動き出した。今年、金比羅神社大祭では、ボランティア部が祭りの裏方として活動したり、吹奏楽部が演奏したりする等、祭りを盛り上げた。地域の方からは、地域の高校として存在感を感じるとの意見をいただいた。高校生模擬議会における取組は、地域貢献に加え、本校の情報発信においても大変有効であった。

### 3 生徒の実態～生徒が抱える課題～

インターネットトラブルを防止するために、生徒だけでなく、保護者も一緒にインターネットの危険性について考える機会を持っているが、SNSに起因する人間関係のトラブルが発生している。

また、積極的にボランティア活動に参加し、地域に貢献する生徒が多くいる一方、友達に対して不用意な発言をして相手を傷つけてしまったという事案も発生している。

学習指導、生徒指導、進路指導、人権教育等、教育活動全体を通して、生徒一人一人の存在や思いが大切にされる学校・学級づくりを推進し、「自分の大切さと共に他の人の大切さを認める」という人権感覚を育成することが重要であると考えます。

### 4 安心して過ごせる学級づくりへ

そういった現状を踏まえ、安心して過ごせる学級づくりを進めるために取り組んだ1年生の行事として、次の二つがある。

#### (1) 校内オリエンテーション週間

4月に入学してきたばかりの1年生全員に対して、集団行動や学習の仕方等、今後3年



▲ オリエンテーション最後の妙見山登山

間、ひいてはその先の生活にも結びつく物事の見方・心構えを伝えた。今年度は本校の背面にそびえる妙見山登山を行った。異なる中学校から集まってきた生徒たちが同じ苦労と達成感を味わい、時にはコミュニケーションをとることで、一気に親近感と仲間意識が生まれる絶好のチャンスとなった。

(2) 5月の三者懇談

保護者との連携を密に生徒の成長を支えるために全学年で5月と7月に三者懇談を行っている。特に5月は、本校に入学して間もない1年生にとって、新しくできる友達との距離感を手探りする楽しみと同時に、実にピリピリとした緊張感をもって過ごす時期である。5月の三者懇談は、新しい仲間とともに様々な行事を経験し、新年度を順調で明るいスタートが切れるようサポートするうえで、大きな役割を果たしている。

5 学級を超えた取組

(1) 特に重点として捉えていること

成果の大きさにかわかわらず、その成果を認め、ほめることに重点を置いている。生徒会活動や、学級委員、文化祭や体育大会でのリーダーシップなど諸行事に欠かせないイニシアティブをとる機会を3年間でできるだけ多く経験させたい。小さな集会でも、生徒自治の重要性を生徒に認識させ、司会を交代で行わせる。失敗したとしても、最後までやりきったことを心から褒める。一人一人が主役であり、思うように進行できなくても頑張れば、周囲から賞賛と感謝の声を直に聞こえるように細かな仕掛けを工夫している。

また、本校では、部活動や文化活動で活躍した生徒の表彰に加えて、ジャンルを問わずどんなに小さなことでもその勇気や善意の心を称える「妙見賞」を用意し、全校集会や終業式等で表彰している。更に、各学年での学習や行事における功績を表して、良いことに対してささいなことでもその成果を認めて表彰したり、披露したりして褒めている。妙見賞の一例を挙げれば、逃げ出した犬を捕まえて飼い主に届けた親切心を称賛したことがあった。飼い主は、心から感謝しておられた。

(2) 情報の共有

クラス全体に同じ指示を一斉にしても、そ

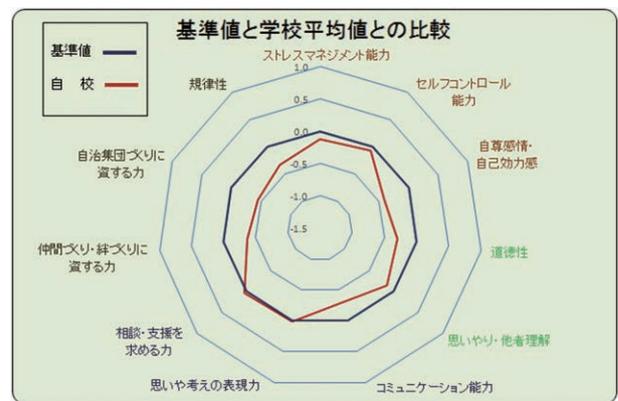
の理解度は生徒によって異なる。教室を見渡せば、色々な工夫が目に入る。普通掲示物は後部掲示板に貼るものだが、重要な連絡事項は正面の黒板の両端に貼り、一日に何度も目に付くようにしている。教室移動の連絡や、学習関係以外のイベント募集等の要項は出入口扉の内側に貼っている。生徒が一様に指示内容や情報を共有でき、何の迷いなく安心して行動できる。

(3) 「いじめ未然防止プログラム」

第1学年でまず取り組むべき課題・目標が、人間関係の構築、いじめ未然防止、自信獲得であると考えている。そこで心の教育総合センター提供の、生徒の資質・能力の把握に生かせる「CoCoLo-34」を活用した。

① アンケートの実施・集計及び分析

まず、「CoCoLo-34」アンケート調査を行い、分析ツールを使って集計結果を打ち出した。Excelベースで、各カテゴリーと資質・能力の内容が参照でき、全体の円グラフと各資質・能力の細かい分布図が用意され、当該集団の強みと今後の課題(図1)、その弱点を補うための授業プランが用意されている。



▲ 学年全体の分析結果

② 課題設定

データをもとに、学年・クラスの課題を設定した。

1年生は、新しい人・習慣の出会いの中で、人と仲良くなったり、ぶつかり合ったりしながら、自身に問いかけ、悩む時期である。実際に4月から年が明けた2月になっても、直接的・間接的なぶつかり合いが絶えない。

③ 授業プランの立案・実施

そこで、この「いじめ未然防止プログラム」の中から、生徒の実情に合ったホームルーム

材料を参照し、「考えのクセ」という授業プランを採用した。それを課題解決に向けた授業プランに編集して提示するとともに、本校の生徒に必要なグループワークに変更し、お互いがヒントを出し合う形式を採った。「考え方のクセ」が6種類（(ア)感情的決めつけ、(イ)選択的注目、(ウ)過度の一般化、(エ)拡大解釈・過小評価、(オ)自己非難、(カ)白黒思考・完璧主義）に分類され、それぞれに分かりやすい例が示されているので、生徒も把握しやすくなっている。

例えば(イ)の選択的注目には、「友達と楽しく過ごしたのに、相手が一瞬だけ妙な表情をしたことが気になって落ち着かない」という具体例が示され、それを読んだ生徒たちがつい頷いている姿が見られた。6通りの「考え方のクセ」に共通する傾向は、悲観的・マイナス思考という点である。自分に自信がなく、自己有用感に乏しい生徒が陥る傾向であるようだ。そんな生徒が本校には多く見られる。授業プランの中で、各自が最も当てはまる「考え方のクセ」を取り上げ、その「クセ」のおかげで良かったこと、困ったことを書き出し、困っている自分自身にかけてあげたい励ましの言葉を6～8行で書いてみる。この授業プランでの醍醐味は、個々の生徒の自信が持てず一番不安に思っていることに対し、周囲のいろいろな人から励まされるという点である。授業の最後の活動で、教室内を歩き回って、自分自身に向けて書き上げた励まし

の言葉を、学級内の4人以上の生徒に気持ちを込めて言ってもらう。困って悲観的になっている自分が励まされ、口々に「ありがとう」と頷いて笑顔になった。

#### ④振り返り

今回のホームルームを通して感じたことを思い思いに綴らせ、各々の生徒が自身の悲観的な側面を改めて再確認する良い機会となった。普段は深く接することもない人とも励ましの言葉をかけ合うという場面は、形式的ではあるが、そうと分かっているにもかかわらず。生徒の爽やかな表情に、今後の継続した授業プランの必要性を実感した。次には新たな課題を見つけ、その課題解決に向けた授業プランを練っていく予定である。

## 6 おわりに

これまでに、本校独自の行事の中で、生徒が生徒同士、地域の公共施設、町議会との関わりを持ち、大人から見守られながら、個々に成長する姿が見られた。そして、CoCoLo-34の活用によって、学級・集団の中で集団としてのバランスのとれた活動・共生が各所で芽吹きはじめた。生徒個人が学級の中で、対等な人間関係を保ち、自分の有用感、ひいては自信をもって過ごせる学級づくりを実現しつつある。今後の継続した取組に期待するところである。

### 強みとして伸ばしたい 資質・能力

全体の様子より	カテゴリ別 … 他者と関わる力	「全体の様子」で得点が最も高いカテゴリを1つ表示しています 自校の強みとして更に伸ばしていきたい特徴と考えられます
分布の様子より	資質・能力別… 相談・支援を求める力 思いや考えの表現力	「全体の様子」で得点が高い資質・能力を2つ表示しています 自校の強みとして更に伸ばしていきたい特徴と考えられます

### 課題となる 資質・能力

全体の様子より	カテゴリ別 … 学級集団の力	「全体の様子」で得点が最も低いカテゴリを1つ表示しています 基準値と比較したときの自校の課題と考えられます
分布の様子より	資質・能力別… 自治集団づくりに資する力 自尊感情・自己効力感	「全体の様子」で得点が低い資質・能力を2つ表示しています 自校の課題として積極的に育んでいきたい資質・能力だと考えられます

▲ 図1 学年全体の強みと課題



## 「わだやマーケット」開催 ～総合学科の学習を地域へ～

県立和田山高等学校 教諭 田中 裕輔

### 1 はじめに

平成29年11月25日（土）に第1回「わだやマーケット」を開催した。この「わだやマーケット」は、地域の方とコミュニケーションを図ることで生徒の規範意識を向上させるとともに、地域産業の理解及び産業の担い手としての職業観や勤労観を育成することを目的として実施した。

本校について、「総合学科が何をする学校なのかわからない」「和田山高校はどんな学校なんだろう」などという意見をよく聞く。このことから、本校の教育活動が地域に浸透していないということがうかがえる。この現状を打開し、生徒の頑張りを地域の方々に知っていただくため、平成28年度まで実施してきた総合学科発表会を兼ねた行事として、「わだやマーケット」を本年度初めて実施することとしたのである。



▲ わだやマーケット開会式

また、「わだやマーケット」では、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」といった総合学科の特徴的な授業内容の発表を、こ

れまでの総合学科発表会と同様に行った。さらに、地域の方と接する機会を設けるため、地域特産物等の販売実習を取り入れた。このことによって、ビジネス教育に力を入れている本校を地域の方に知ってもらうとともに、生徒の職業観や就労観の育成を実現することができる考えた。

### 2 実施内容

- ①授業発表・展示
- ②物品販売
- ③フードコート
- ④キッズスペース
- ⑤ステージ発表

- ・ A S A G O レンジャー隊によるショー
- ・ 朝来警察署員の劇
- ・ 照福和太鼓クラブによる演奏
- ・ 朝来市観光大使金山ゆいさんとキッズダンサー、本校生徒のコラボステージ

- ⑥献血



▲ 物品販売の様子

物品販売やフードコートでは、香住高校、但馬農業高校、氷上高校をはじめ市内の企業や団体からブースの出店の協力を得て、一緒に販売などの活動をさせていただきました。生徒同士で過ごす普段の生活とは違い、一般のお客様と接することで、「お客様に喜んで帰ってもらう」という自覚を持って活動に取り組むことができました。そして、「総合的な学習の時間」で学習した接遇マナーをしっかりと実践することができました。

また、「総合的な学習の時間」の学習として、本事業のロゴマークの作成も行った。



▲ ロゴマーク作成の様子

下のロゴマークは、朝来市在住のアーティスト木村淳氏の指導のもと、生徒が作成したものである。



▲ 生徒がデザインしたロゴマーク

全校生徒が「わだやマーケット」に携わるために、次のように役割分担をした。

年次ごとの役割分担表	
1年次	授業発表・地域緑化運動・昔話サロン・聞き込みアンケートなど
2年次	授業発表・駐車場・会場案内・放送・誘導など
3年次	物品販売・フードコート・授業展示・科学実験など

さらに、生徒発案の地域活性化企画としてASAGOレンジャー隊を立ち上げ、「わだやマーケット」でお披露目した。朝来市内の四つの地域と一つの町をモチーフに各キャラクターを設定した。今後は、地域のボランティア活動に参加するなど、地域活性化を目的に活動していく。



▲ 生徒発案のASAGOレンジャー隊

お披露目してから初となる活動は、12月10日に行った和田山町のクリスマス清掃活動であった。大変寒い日の活動であったが、この活動に参加した生徒は、「小さな子どもたちがASAGOレンジャーを見て、僕たちもあんな風に活躍したい」「レンジャーが掃除をするなら私たちも掃除がんばろ」と思ってもらえたら良いと語っていた。



▲ 地域の清掃活動

### 3 成果と課題

#### (1) 来場者数について

本年度から新たにスタートをきった「わだやマーケット」。当日は、約750名の来場があった。当初の目標を上回り、初年度としては満足できる来場者数となった。これだけのお客様に来場いただけたことは、大きな成果である。多くの人に、和田山高校がどのような取組をしているのかを知ってもらう良い機会となった。特に、下表で示したように地元朝来市からの来場者が多く、地元の高校としての和田山高校に対する関心の高さがうかがえた。しかし、朝来市以外からの来場者数は少なく、10代の来場者も少なかった。総合学科発表会やオープン・ハイスクールを兼ねていることを考えると、10代の来場者が少ないことは今後の大きな課題であり、「わだやマーケット」を周知する方法を検討する必要がある。例えば、効果の高いポスターの配布数を増やすなどの対応をしていきたい。

1. どこから(人)	2. 年齢(人)	3. 何で知りましたか(人)	
朝来市	62	10歳未満	1 折込チラシ
義父市	17	10代	10 ポスター
豊岡市	13	20代	11 ホームページ
香美町	4	30代	13 Facebook
新温泉町	1	40代	14 ケーブルテレビ
その他県内	2	50代	18 あさぶら
県外	1	60代以上	27 生徒から

#### ▲ 来場者アンケート結果 (アンケート回収分)

PR方法	内容
折込みチラシ	A4チラシ約10,000枚。神戸新聞(朝来市、義父市)
チラシ	A4チラシを近隣店舗に設置依頼。生徒の手配り。
ポスター	駅前商店街、市役所などの施設で掲示。
のぼり	本校グラウンドのフェンスに20本ののぼりを設置。
ホームページ	和田山高校HPに掲載(Facebookとリンク)
Facebook	Facebookに掲載(和田山高校HPとリンク)
ケーブルテレビ	地域ニュースで紹介。生徒出演のCM作成。
あさぶら	朝来市ポータルサイト「あさぶら」で紹介。
学校行事での案内	文化祭などでCM放映。

#### ▲ 今年度実施したPR活動

#### (2) 来場者の意見について

ご来場者から多くの意見をいただいた。「明るい挨拶で迎えてもらってうれしかった」「生徒みんなが明るかった」「若い力をわけてもらった」など生徒の接客姿勢をほめていた

だく内容が多かった。これは「総合的な学習の時間」で学習した接遇マナーを生徒が実践した結果であるといえる。

また、一昨年度に実施した熊本震災現地ボランティア活動後から続けている募金活動として、熊本の郷土料理や商品販売を行ったが、それについても「継続してくれていてうれしかった」との声があった。

一方、反省・改善点もたくさんいただき、再考しなければならない課題も多く残った。「販売開始時間が遅い」「レジが少ない」「案内表示が少なく、わからない場所があった」という運営上の問題点が多く上がった。さらに、「もう少し生徒が主体的に」や「生徒にきびきびとした行動をとってもらいたい」などの意見もあった。運営上の問題については、販売時間の再検討、レジや案内表示板の増設といった対応を生徒と考えていきたい。また、生徒の役割分担を再検討し「全員で作りに上げるわだやマーケット」を意識できるよう指導したり、活動する内容を増やしたりするなどの対応をする。

### 4 今後に向けて

初年度ということもあり、予測できないことがたくさん出てきたことから、どうしても教員が主導してしまう部分が多かったが、次年度からは、今回の経験をもとに生徒に任せる部分を徐々に増やしたいと考えている。そして、「全員で協力する」「みんなで一つのことをやり遂げる」という経験は、生徒を大きく成長させる。生徒全員が「自らの手でわだやマーケットを運営する」という気持ちをもって協力して作り上げるものにしたい。

今後は、「総合的な学習の時間」や「産業社会と人間」などの学習の中で課題解決へ取り組み、「和田山高校と言えば、わだやマーケット」と言われるように和田山高校を代表する特色ある活動にしていきたい。